



あなたにオススメ「女ふたり、暮らしています。」

2021年の夏ごろ、Amazonでいつものように猫缶などを購入していたら、あなたにオススメの欄に「女ふたり、暮らしています」という本が出てきた。それまではオススメされるものと言えば、キャットフードやペットシートと購入履歴に沿ったものばかりだったのに、突然の本。なぜ?と見てみると本の帯には「シングルでも結婚でもない、女2猫4の愉快的な生活」と書かれている。なるほど、猫に関する商品の閲覧が高く、女性である、という項目で出てきたのだろう。ちょっと気になり、まんまんと購入する。なぜなら、その時の生活形態がまさに帯と同じ状態だったから――。



本が届いて読んでみると、『これまでは女と男という原子の固い結合だけが家族の基本だった時代から、多様な形の「分子家族」が生まれていくのではないか。その中で自分たちはW₂C₄（女2猫4）という分子構造でとても安定しているのだ。』という前書きがあり、シングル同士の同居という選択を選んだ2名の著者の日々の暮らしがエッセイとしてまとめられている。個人的に自分の生活と被るところが多く、とても面白かったので、今回のマガジンでは、本の雰囲気をパクリつつ、今の生活スタイルを書いてみたいと思う。王道的ではない暮らし方にもメリットや安定性があるんだということを知っていただければ幸いです。

今の私の生活はW₂C₁₁。女2人猫11匹。

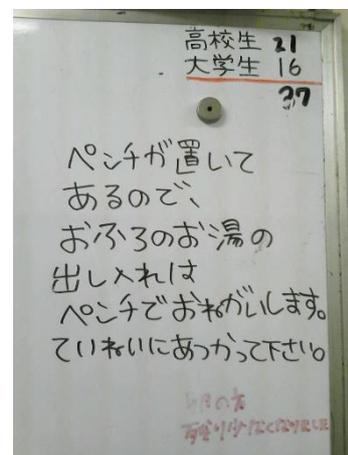
正確に言うと、飼い猫5匹、里親募集中の保護猫4匹、ご飯を食べに通ってくるノラ猫2匹の生活である。

※今回のマガジンは、ただのエッセイです。

紹介：「女ふたり、暮らしています」2021,キム ハナ/ファン ソヌ,CCCメディアハウス

境界線のゆるさ・共同？協働？生活

元々、子どもの頃から境界線が緩いタイプだったと思う。他人の領域に立ち入ることも、自分の領域に入られてこられることも気軽に、他人の迷惑ということをさほど気にせず、気軽に友達の家で晩御飯を食べさせてもらったり、そのまま泊まっていったりすることもよくあった。地元静岡を離れて進学した大阪の大学では、バスケット部の寮生活だったので、3人部屋か2人部屋だった。完全に一人の時間というものはトイレ以外なく、同期や先輩後輩とワイワイする日もあれば、特に会話はなくても同じ空間で何かしている、という共同生活を4年間送った。人によるとは思うが、私の場合狭すぎる共同生活は、空間を時間で区切って複数人でシェアするものではなく、生活そのものをいかに人と重ねて効率よく、楽しながら豊にしていかにかけていた。例えば、洗濯。寮生35名くらいに対して洗濯機が6台だったので、1台の洗濯機に5人が割り当てられていた。使う順番は先輩後輩に関係なく、完全に早い物勝ちで、帰宅するとまず食堂に行き、帰宅の挨拶をしながら、晩御飯を食べている中に自分の洗濯機班の人が居るか確認し、順番予約をする。「ただいま帰りました。〇〇さん寮番ありがとうございます。△△さん洗濯機、次お願いします！」が全寮生共通の挨拶だった。「OK！」と返事がくることもあれば、「次は××だよ」と言われ、部屋やミーティングルームに××さんを探しに行く、ということもある。19時や20時に帰宅して洗濯機が5番目になってしまうと寝る時間が遅くなるので、この洗濯機争奪戦は毎日静かな戦いとして繰り広げられていた。1台の洗濯機を時間を区切って5人でシェアするのはいかにも共同生活である。一方で、私は体も小さいし、マネージャー業メインだったので洗濯物の量も少ない。自分ひとりで洗濯機を回すのはもったいないし、めんどくさい。でも毎日洗濯はしたい。そこで、同期のイサに「洗濯一緒に回さない？洗剤は交互に買うことにして、イサの方が洗濯物の量多いから若干お得じゃない？洗濯機の順番待ち2人で協力した方が早い順番を取りやすいし、他の人的にも5人から実質4人になるからメリットがあるし。」と提案した。イサはそれいいやん！と提案に乗ってくれ、洗濯協働利用がスタートした。初めは洗濯を交互に回すという話だったはずだが、結局イサの方が洗濯物が多いことや、洗濯ができなかった時に翌日受けるダメージがでかいことから、いつのまにか毎日イサが洗濯を回すときに一緒に小池の洗濯もしている。という状態になっていた。それでも、イサは順番待ち争奪戦が有利だし、洗剤代が浮くからと、機嫌よく私の洗濯を4年間回し続けてくれた。これにより洗濯の煩わしさや手間から完全に解放された。35名ほどの寮生活も、振り返ると、自分の物や空間をなるべく死守しようとする人、なるべく人と共有して楽しもうとする人、なるべく人に寄生して得しようとする人、色んな生活スタイルがあったと思う。



大学院に進学して初めての一人暮らしを経験したのだが、プライベート空間最高！と感じていたのは最初の数か月だけで、一人ぼっちの空間は逆に集中できず、課題や研究は消灯ギリギリまで大学の研究室でしたり、ファミレスでやったりした。どうぶつ基金に就職してからも、一人職場だったので、出勤して電話では毎日色々な人とやり取りをするものの、面と向かっての会話はゼロの日がほとんどで、人としゃべりたいがあまり休みの日にバスケットボールショップでバイトをしていた。たぶん私はあまり一人暮らしに向いていない。

4 匹目の猫？居候生活のはじまり。

どうぶつ基金の仕事をやめ、ノラ猫生活と称してフリーターをしつつ猫に関する相談に乗ったり手伝ったりしている模索期間の中で、ある地域に住むノラ猫7匹のTNRをすることになった。7匹となると頭数も多く捕獲や病院に搬送するのも大変なので、北摂TNRサポートののらねこさんの手術室の捕獲送迎サービスを依頼することにした。なんと、距離計算の出張交通費のみで、不妊手術の為であれば何匹でも無料で捕獲してくれるという破格のサービスだった（※今は捕獲料がかかる）。その捕獲送迎を依頼したことをきっかけに、のらねこさんの手術室さんとの繋がりができ、病院の経営メンバーである秋本さんと安田さんが飲み誘ってくれた。何をしゃべったかはほとんど覚えていが、すごく楽しくて、もっと喋りたいけど解散の時間が迫っているという中で「1週間泊めてくれるなら、1週間病院タダで手伝いますよ！」という発言が私から飛び出した。それに間髪入れずに「いいっすね！」と秋本さんが返し、2017年1月21日～28日まで、住み込みで病院のお手伝いをするようになった。

中高生の頃、地元では有名なNHKの特集や新聞にも頻繁に登場する動物保護施設があり、2年ほどボランティアとして休みの日に通うことを続けていた。3年目くらいで初めてバックヤードと呼ばれる裏側のシェルターを見せてもらったことがあった。筆舌に尽くしがたい劣悪な飼育環境で、強いショックを受けた。いくら有名でも、テレビに出ていても、NPO法人でも、実際に自分の目で見ずに信用することはできないんだと思うきっかけになったエピソードだ。実際に見ると言っても、1時間程度の見学ツアーって本当に何も分からないと思う。限られている時間の中で、しかも特に信頼関係もない中で、見学者に見せられる範囲が限られるのは無理もない。軽く見学した程度で、相手を知った気持ちになるのは浅はかだ。そんな昔からの想いが私の中にくすぶっていて、お酒の力も加わって、腹の中から出



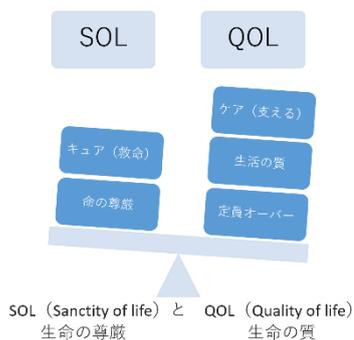
てきた提案が「1週間泊めてくれるなら、1週間病院タダで手伝いますよ！」だったと思う。快諾してくれた秋本さんのノリの良さに感謝だ。

当時、のらねこさんの手術室は、共同代表の秋本さんと安田さん、捕獲送迎スタッフの植田さん、獣医師の村上先生の4人しかおらず、8坪の小さい貸店舗で営業していた。秋本さんの家に泊まり込み、早朝の捕獲から病院内の掃除や入院の猫さんたちのお世話、機具洗いなど初めの3日ほどはただただ受け身に日々の仕事を覚えながら手伝わせてもらった。後半にさしかかってくると、少しずつ病院の大変そうなところが見えてきた。領収書兼明細書がすべて手書きだった為、精算にかなり時間を取られていたこと、毎月の手術頭数計算が手計算になっていること。他には、日々の予約管理がすべて病院の手書き台帳に集約されており、捕獲送迎に出ながら電話を受けている秋本さんの車には、予約台帳に書くための付箋が十何枚も張り付けられている状態だったこと。アナログなために膨大な時間が取られてしまっている部分を簡単なIT化をするお手伝いであれば、力になれそうだった。そこで、後半は領収書のエクセルテンプレートを作成したり、オンラインで日々のスケジュールを各スタッフが管理編集できるものを作ったりさせてもらった。

寝泊りさせてもらっていた秋本家は、一人暮らしにしては広く（かつては彼氏と同棲していたが、別れてかも仕事が忙しすぎて引越しをする余裕が無く、今の広い家に住み続けている状態だったらしい）、飼い猫が3匹いた。その中のワープさんという女子は、秋本さんが他の猫の臭いが強くついている物を持って帰ってくると、マーキングのごとく、それにおしっこをする、という異物に厳しいタイプだった。実際、初日は朝、足元が冷たい・・・と思って起きると布団の足元におしっこをされていた。少しずつワープさんとの距離も縮まり、数日後はお腹の辺り、そして最後には布団で寝ていたら顔面におしっこをされて飛び起きる、という夜をハイライトに、ワープさんにとって“異物”から“知っている臭いの人間”に昇格したのか、おしっこされなくなった。それどころか、夜は布団で添い寝してくれるようになった。実家暮らし頃は当たり前のように、夜はかならず猫が布団に入ってきてくれて一緒に寝ていた。柔らかくて暖かい猫に触れながら眠ることはこの上ない幸せで、それを思い出し涙が出そうだった。



秋本さんとの個人的なやり取りでは、移動中の車の中や、帰宅して就寝するまでの間中、ずっと喋っていた。自分の動物観、人生観、趣味や猫に人生をささげたいと思うきっかけになったエピソードなど、色んなことを喋りつくしても、1週間経って感じたことは「もっと喋りたい」だった。同じように猫の活動をしている人でも、SOL（命の尊厳）とQOL（生活の質）のバランス感覚は人それぞれである。これがなかなか同じ感覚の人には



出会えないのだが、これまで自分が出会った活動家の中で、秋本さんは一番近いような気がした。

1週間が終わっても、もっと住み続けたいと思った私は「猫のお世話もするし、猫の遊び相手にもなりません。自炊レベルなら料理もします。掃除は苦手ですが、4匹目の猫を飼ってみるのはいかがでしょうか？」という売り込みで、居候生活延長の交渉を行った。これまた「いいっすね！」と軽くOKを出してく

れた秋本さん。居候先ゲット。西宮市にあった自分の6畳一間のマンションと秋本家の2拠点生活が数か月続いた頃には、居心地が良すぎて98%秋本家に住んでいるようになっていた。そうすると、自分の家の空家賃を払い続けているのも勿体ないので「あの、自分の家引き払ってもいいですかね？」と聞いたところ「うん」とあっさり返ってきたので、1年目には完全な居候に進化し、気づけば3年も続いていた。



それぞれの得意と不得意

私は物を散らかすことが得意で、掃除や整理整頓が苦手だ。自慢じゃないが、その辺に散らかっている物を辿ってもらったら、コナン君じゃなくてもその日1日、私が家で何をしていたか推理することができると思う。掃除とは皆嫌いだけど理性で頑張っているものだと思っていた。しかし、秋本さんと暮らしてみても、散らかっているものを何もなかったかのように収納すること、料理でダメージを受けたシンクをまるで新品のごとく磨きあげることに快感を感じるタイプの人が存在するのだという事を知った。趣味は断捨離、家の中に生活感を出したくないという。家なのに。私がカップラーメンを食べようと思えば、ラーメンの蓋を止める付属のテープをキッチンのカウンターに貼ってお湯を注ぎ、振り返ってテープを貼ろうとしたらもう捨てられている、という事は日常茶飯事だ。一方で、食にはあまりこだわりが無く、コンビニの唐揚げとか、自炊をしてもソーセージと練り製品しか入っていない鍋とかなかなかワイルドな食生活をしていたので、薄味派で割と野菜が好きな私が料理を担当するようになっていった。

散らかすことと、ご飯を作ることは私の担当で、片づけることと、食べるのが秋本さんの担当、猫は2人で最大限可愛がる。という絶妙な分担が自然とできていった。性格が真逆なおかげで奇跡的に合っていた私たちは、喧嘩をすることもなく確実に生活の質が上

がった感覚を持ちながら日々暮らしていた。

飼い猫の QOL を考える

居候生活の3年間で、大ケガや病気が原因でノラ猫生活には戻すことができないうえに、里親譲渡も難しい子が2匹仲間に加わり飼い猫は5匹になった。私の母親は、DV被害者の支援をする活発な活動家だった。大人になった今では、母親の活動は社会的意義が大きく、多くの女性や子どもの為に多くの時間を使っている素晴らしいものだと思う。ただ、子どもだった自分からすると、自分の家のことは後回しで、他人のお世話ばかりしている母。というように、寂しい気持ちから反抗的な気持ちを持つことも多くあった。経済的に恵まれていても、愛情をもらっていても、子どもにとっては家が世界であり、他の子どもたちの境遇と比較して、自分がいかに恵まれているのか理解するのは難しかった。家をあげがちな活動家の子どもの寂しさを知っている自分にとって、自分の飼い猫ができれば、なにより優先して飼い猫を大切にしたいという気持ちが強くあった。猫からしたら、飼い主の活動の社会的意義もクソもなく、飼われている室内の空間と飼い主だけが世界だ。飼い猫すら幸せにできない人がノラ猫の幸せを作れるわけがないと思っていた。飼い猫の QOL を考える一。

それなりに広い家、室内で育てる猫草。もっと自由空間をと、大きなキャットタワーを手作りした。休みの日には猫感謝デーを設定し、おいしいおやつを用意したり、オモチャで遊びまわったり・・・悪くはない環境だと思うものの、もっと猫の生活の質を上げられないものか、と常々話し合っていた。実家が田舎な私も秋本さんも、子どもの頃は外中自由な飼い方をしていた。木に登り、虫を追いかけ、草を食べる。土の上でゴロゴロして、たまに喧嘩をして帰ってきては甘えん坊になる・・・そんな猫の生き生きした姿をどうしても忘れられず、できれば「外で遊ばせてあげたい・・・」という願いが日に日に膨れ上がっていった。ただ、マンションの2階から猫を外に出すことは危険すぎるし、実家のような田舎ならまだしも、普通の街中で外中自由飼育をすることは確実に猫の寿命を縮めてしまうことになる。飼い猫の命に責任を持ちつつも、外に出してあげられる環境、つまりキャットランを作れる広い庭付きの田舎の家に移住したい！ということで、物件探しが始まった。



物件探し

物件探しは予想以上に大変だった。不動産屋さんに行っても、「お二人の関係は？」と聞かれ、「今のところ人生のよきパートナーです」みたいに答えてみても「あーシェアハウス可物件でしぼらないとですねえ」というような回答になる。シェアハウスとか同棲カップルとかそんな気軽な雰囲気のカテゴリをされることに腹立たしく感じ、猫と自分たちの今後の人生の為に大きな決断をしたいと腹をくくっている私たちの覚悟を伝えたくても、担当者には届かないようだった。大手はダメだと、家の近くにあったとても小さな不動産屋さんに行ってみることにした。予約なしの訪問だったが、「どんな条件の家に住みたいんですか？」とゆるく対応してくれた。「職場から車で30分圏内で、庭があって、猫の5匹飼ってよくて、DIYとか好きにさせてもらえて、できれば平屋で、賃貸がいいです。」という「そんな物件ないよ。でももしも条件に合うような物件が入ったら連絡しますね」と一応連絡先を聞いてくれた。そんな物件ないよと即答され落ち込んで帰宅した私たちだったが、翌日に不動産屋さんから「ありましたわ！平屋じゃないんですけどね」と電話がかかってきた。「平屋じゃなくても全然いいです！！」とさっそく次の休みに物件を見に行くことにした。これ以上進んで大丈夫なのか不安になる道を進んだ行き止まりにその家はあった。正面はうっそうと茂る木々で日陰がちなのか、苔むした雰囲気である森の中の家という感じ。裏庭は車を10台は軽く止められるくらい広く、一面に菜の花が咲いていた。大阪万博の前に建てられた物件で、今の法律の耐震基準に合うかどうかの記録がない為、違法物件というくくりになってしまうらしく、ずっと売りに出ている買い手がつかなかったそうだ。今回の私たちの提案を聞いて、不動産さんが大家さんに賃貸で貸してみてもどうかと提案してくれたらしい。物件に一目惚れし、契約を進めることになった。25年以上空き家だった為、下水をつなげるところから工事が必要だった。下水や床と屋根といった最低限のところは大家さんが改修してくださり、それ以外のリノベーションはこちらで費用を負担すること、家賃は月々6万円ということで交渉がまとまった。リノベーションは2人の貯金を使いきるほどの人生で一番大きな買い物になった。後から変わったことだが、大家さんも、不動産屋さんも、リフォーム会社さんもノラ猫にご飯をあげたり、TNRをしたりしており、この物件きっかけで大家さん宅にご飯を食べに通っているノラ猫7匹と、不動産屋さん宅に通っているノラ猫1匹TNRを手伝った。リノベーションは大きな買い物で不安もあったが、関係者が全員が猫好きだということが分かり、これは猫神様の采配だから大丈夫だと安心できた。



契約から約半年後に家のリノベーションが完成し、念願の引っ越し。予算の関係でものすごく広いわけではないが、念願のキャットランも完成した。約3メートルのフェンスの上部80cmはアクリル板を張って登れないようにしている。猫たちを外で遊ばせてあげられる喜びを噛みしめている。広い縁側と大きな窓があるので、外を眺めているのも楽しそうだ。2階建ての物件だったので、2階の1室を保護猫部屋にすることができ、活動の幅も広がった。



お互いの親もこの強固になった協働生活を喜んでくれており、何か仕送りの物資が届く時はいつも2人分入っている。でも結婚関係のように相手の親へお礼や気遣いはいらないので、秋本さんが親と電話している時に「美味しかったですー！！」と明るく感謝を伝えれば十分だ。現状2人とも自営業のような形なので、あまり不便などは無いが、もし自分が事故や病気になって大手術が必要になったら、田舎から両親を呼び出すよりも、付き添いや意思決定の代行はできれば秋本さんにしてもらいたいと思う。ただ、今の日本では私たちの関係は「知人」や「友人」の域を出ないことを少し不安に思う。「女ふたり、暮らしています」の著者は、本の締めで「婚姻や血縁によって結ばれている伝統的な家族の形に合わない家族の形がきっと増えることだろう。一中略一 個人が喜んで誰かの福祉になるためには、法と制度の助けが必要だ。以前とは違う多様な形の家族が、より強く結ばれ、もっと健康になれば、その集合体である社会の幸福度も高まるだろう。」と結んでいる。本当にそうだと私も思う。

今は飼い猫が5匹と、里親募集中の保護猫が4匹、ご飯を食べに通ってくるノラ猫が2匹、合計11匹と秋本・小池と一緒に暮らしている。W2C11が今の私の大切な家族だ。

おわり



小池英梨子

ねこから目線。～保護猫とノラ猫専門のお手伝い屋さん～ 代表

NPO 法人 FLC 安心とつながりのコミュニティづくりネットワーク

「人もねこも一緒に支援プロジェクト」 プロジェクト代表

ご意見・感想・お問い合わせ：e.kosame12@gmail.com